

生涯学習部会Ⅰ

吉 川 弘

(横浜国立大学)

生涯学習部会Ⅰでは、部会企画“「生涯学習」をどうとらえるか”について、指定質問者白石克巳氏（玉川大学）、登壇者村田文生氏（埼玉県立文書館）、同池田秀男氏（広島大学）から発言があり、これをもとに部会参加者全員による研究討議が進められた。なお、この部会企画に先だち、3つの発表があった。全体討議はこの3つの発表を含めて行うことになった。

まずは3つの発表であるが、

最初に、斎藤裕氏（帯広市文化・スポーツ振興財団）による「生涯学習としての芸能文化—教育・社会・地域—」、第二に、田中雅文氏（国立教育研究所）による「大学公開講座に参加する中高年学習者の特性」、第三に、三浦清一郎氏（福岡教育大学）、重松孝二氏（福岡県教育委員会）、末崎ふじみ氏（九州女子短期大学）による「10年後の生涯学習—福岡県有識者1,000人の提案—」である。これらの発表要旨は「第11回大会発表要旨集録」にゆずることにする。

さて、つづいての部会企画“「生涯学習」をどうとらえるか”についてであるが、まず最初に指定質問者白石克巳氏から次のような発言がなされた。

「文部省以外の省庁でも、また、民間でも様々な生涯学習をうたった教育事業が行われている。1990（平成2）年制定された「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」でも生涯学習の定義はない（そういう声もでた）。一体「生涯学習」とはどんなことなのか。まずは「生涯学習をどうとらえているか」を把握し、そのうえで「生涯学習をどうとらえていくべきか」を論議していきたい。」

そこで、この「生涯学習をどうとらえているか」について、村田文生氏から発言がなされた。村田氏の発言は、埼玉県議会の審議会答申をもとに「生涯学習推進」の解釈をめぐってのものであった。その要旨は次のようなものであった。

- 「○ 生涯学習を推進するとは、人々の学習参加気運を醸成し、学習環境を整えること。
- この「生涯学習推進の目標」は、
 - ① 1人ひとりの生きがい感をたかめ、
 - ② 1人ひとりの生活にうるおいと活力をもたらし、
 - ③ 家庭、学校、地域社会で生涯学習への取りくみを進める。
 - ④ また、地域社会づくりや文化の継承・発展に資する。
- 「生涯学習推進の具体的な内容」は、
 - ① 生涯学習推進組織の整備、（いま学ぶことの大切さを認識するよ
うな意識改革）
 - ② 生涯学習援助事業の実施
 - ア 生涯学習推進組織の整備
 - イ 学習機会の提供
 - ウ 学習プログラムの開発提供
 - エ 指導者の養成確保、活用のシステム化
 - オ 情報（学習教材を含む）の収集、提供、相談体制の整備
- 生涯学習推進の主体者は、
学習環境の整備にあたることのできる県、市町村行政、民間事業

者、団体等が考えられ、それぞれが組織化し、相互に交流できる場を設ける。

○ 今後の課題

- ① 生涯学習の理解促進は、国民皆学習者意識の普及と学習歴重視の徹底が図られるべきこと。
- ② 集合学習重視の考え方から個人学習にも重きを置く考え方へ。
- ③ 学習相談の対応重視へ。
- ④ 「学習成果の地域社会への還元促進」の具体化を図ること。」

村田氏の発言には、「生涯学習」の概念化はみられず、「生涯学習推進」についてのものであったが、この中から「生涯学習」を抽出すれば、「生涯学習推進の目標」で述べられたように「1人ひとりの生きがい感をたかめる（学習）」、「1人ひとりの生活にうるおいと活力をもたらす（学習）」ということになろうか。

村田氏はつづけて、

「学習は学習者が自ら作成したプログラムで行うことが大切である。公民館や大学の公開講座等では、できるだけ多くのプログラムを提供し、学習者はこのプログラムの中から選択できるようにすることが大切である。」と述べた。

池田秀男氏は、

「村田さんの場合、生涯学習は生活のひろがりの中で、即ち、生活全体の中でとらえられている。それに賛成。学習は、教師と生徒、教材の三者で構成されるものばかりではない。このような学校式教育を生涯学習の中でひろげないようにすべきである。集団学習においても、このような学習（教師と生徒、教材の三者で構成されるものばかりでない学習）を与えるような場に行なければならない。個々人のそれぞれの学習を結びつけるような集団学習でなくてはならない。」

と、村田氏の発言を受けた上で、「生涯学習をどうとらえるか」について、次のように氏自身の発言を行った。

「1. 問題意識……「生涯学習」はあいまいであり、行政施策を立案するには、「生涯学習」をどうとらえるかが課題である（調査をするに当たっても）。

2. 意味の構造化

① 生涯学習をどうとらえるか。

教育の対象として考える時には、それは、意図的、継続的な学習ということになろう。

② 全体と部分の関係（接続と統合）

全体と部分の依存関係（システム）である。

このシステムがポイント。

少年のときの学習、成人のときの学習、これはともに同等である。ただし、そこに発展がある。

これが発達課題であり、この接続が統合（連続した発達課題）といわれる。

また、横のひろがりでは、学校の学習と経験学習とは内容的には異なる。

この学校の学習と経験学習の接続を統合させることが大切。

③ 学習のプロセスのとらえ方（プログラムの問題）

学習の機会を提供者の側だけで広げていくと管理教育になってしまう。学習者の学習サイドからプログラムを作っていく。（個人学習→相互学習→集団学習）

また、自己完結型のプログラム（学校教育はもちろん、公民館の学級・講座も）、これを個々人の学習に対応したプログラムに編成すること。」

この村田氏、池田氏の発言をふまえ、討議に入ったが前記3つの発表への

質疑も含めたため、時間がなくなり、じゅうぶんな討議に発展させることは困難であった。

部会討議でだされたことで興味深かったのは、林部一二氏（帝京大学）の「生涯学習といい、生涯教育という。「学習」と「教育」をどう考えたらいいのか。」という発言に対し、池田氏が「学習は、個人が、いつ、どこでも行うものであり、はじめと終わりはない。教育には、はじめとおわりがある。また、教育は社会的制度、社会的慣行ととらえられるが、生涯学習を支えるものはあくまでも自由な自己学習である。」と答え、このことについても討議を深めたかったが、時間がきてしまった。

しかし、「生涯学習をどうとらえるか」について考える際、部会討議の最後に提示された「生涯教育」と「生涯学習」の差異、これは極めて重要な視点であるように思う。それは、「生涯教育」と「生涯学習」の定義を明らかにするということもだが、生涯教育という立場、即ち、教育する側からとらえる「生涯学習」と、学習する側がとらえる「生涯学習」に違いがあるのではないかということである。池田氏の発言を借りると、教育する側からとらえる生涯学習は、はじめと終わりがあり、意図的、継続的な学習、ということになるが、学習する側からとらえる生涯学習は、はじめと終わりがあるものではなく、自由に行う自己学習である。だが、生涯学習を促進・援助するということからすると、教育の対象となる、はじめと終わりのある、意図的、継続的学習ばかりを促進・援助するだけでなく、学習者の自由な、自己学習の促進・援助を図らなければならない。この辺を明確化することが、生涯学習推進方策を樹立するポイントになってこよう。